社会

基本的な知識をもとに，
なぜだろうという疑問を持って，
柔軟な思考力を磨くことが大切です

中学校の社会科の授業では，われわれを取り巻く社会のできごとを，地理的・歴史的・公民的分野からそれぞれとらえ，よりよく理解することをめざします。そこでは，もちろん正確な事実の把握も大切ですが，ただそれを記憶するだけの受け身の姿勢では発展がありません。重要なことは，常になぜだろうという疑問を持ち，その疑問に対して教室で学んだことと自らの経験とを結びつけ，能動的に考える姿勢を身につけることです。

したがって入試問題では，そのような社会科で要求される力や態度を，どれだけ養ってきたかを問うことになります。地理・歴史・公民分野の他に一般常識的な問題や，融合的な問題も出題しています。

第１回　第１問（歴史分野）

問６　下線部④の「近代国家の成立」を示す次の（ア）～（エ）のことがらを，年代順に古いものから記号で答えなさい。

（ア）　大日本帝国憲法が発布された。
（イ）　西南戦争が起こった。
（ウ）　不平等条約の改正に完全に成功した。
（エ）　四民平等政策がおこなわれ，近代的な戸籍（こせき）が作られた。

この問題は「…1868年からの（　４　）をきっかけとする④近代国家の成立などは…」というリード文から関連して問われているものです。空欄（　４　）には「1868年からの」とあることから，「明治維新」が入ることはすぐに分かってもらえると思います。つまり，明治維新以後の日本という国の発展についてその順序を問うているのです。選択肢（ア）～（エ）にあげてある事柄は，どれも日本の近代にとって重要なものです。解答を出す時，多くの人は，その年代を思い出して並べてみるという手を使ったのではないでし

ょうか。（ア）1889年　（イ）1877年　（ウ）1911年　（エ）1872年。従って答えは（エ）→（イ）→（ア）→（ウ）となります。でも，この方法は結局，歴史の勉強はイコール「暗記」であるといわれてもしかたがないやりかたです。勿論，ある程度は知識を暗記することも必要ですが，本校を受験する諸君には，もう一歩進めて，やや別の角度から考えてもらえたらと思います。

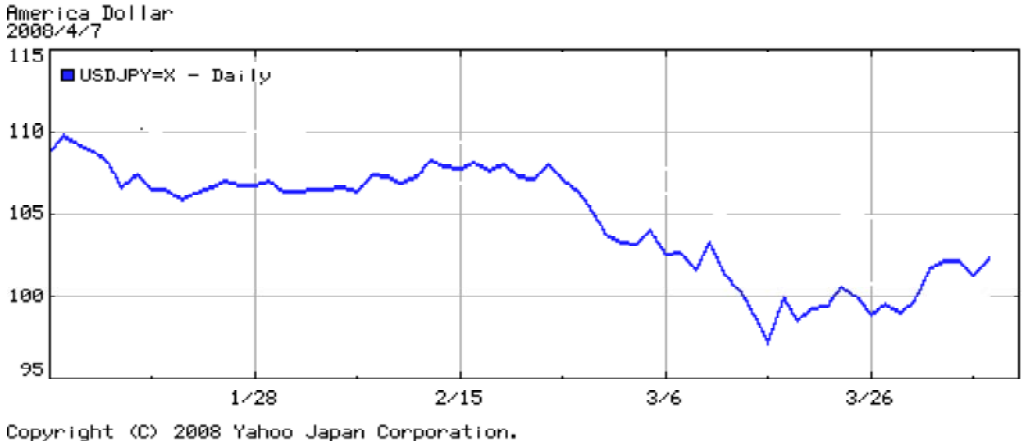
明治維新ののち，日本はどのような段階で発展したかという自分のイメージを持っていれば，細かい年代の暗記などなくても，この問いの正解は得られるはずです。一つの例を挙げてみます。

明治維新によって成立した新政府の最初の課題は，中央集権的なしくみのもとで，社会制度や文化の近代化を行うことでした。戸籍の作成や文明開化はこれにあたります。しかし急速な近代化は，かつての支配者層であった士族の反発をひきおこしました。1877年の西郷隆盛による西南戦争はその最大のものでした。そして武力による政府への抵抗は不可能であることが証明されました。そのため士族の中には言論によって政府を批判し，憲法の制定と議会の開設を求める自由民権運動がおこることになります。1889年の大日本帝国憲法の制定と翌年の帝国議会の開設はその結果でした。このようにして欧米並みの国家体制をととのえた日本は，のち，日清・日露両戦争の勝利によって欧米にならぶ実力を持つようになります。その結果，幕末に結ばれた不平等な条約は20世紀に入って，やっと完全に対等な条約に改正されることとなりました。このように考えてくると，必ずしも暗記のみによらずとも解答がえられます。できれば自分の歴史に対するイメージを持った諸君が本校を受験してくれることを望んでいます。

第１回　第２問（公民分野　「お金」をテーマとした問題）

まずは次のグラフを見てください。このグラフは、今年に入ってから急激に円高が進んだ様子を示しています。みなさんも「円高」という言葉は毎日耳にしていることでしょうし、「円高」が私たちの生活に大きな影響を与えていることも知っているでしょう。また、小学校６年生の教科書でも、日本と外国の国々との文化的・経済的結びつきについては学んでいるはずです。ところが、教科書で学習した内容と、日常生活で触れている出来事とが意外に結びついていないのではないでしょうか。聖光学院の社会科（公民分野）の問題ではよく時事問題を出題しますが、それは物知り的な知識を問うているのではなく、教科書で学んでいることが毎日の生活に深く関わっていることに気がついて欲しいという思い

からです。教科書で学んだ知識をもとに、教科書に載っていない日々の出来事についても調べ、理解することが出来る力。これこそが「聖光社会科」が求める「応用力」です。



下線部⑥（→娯楽費）について、たとえば海外旅行にかかる費用は、日本円と外国通貨の交換比率（為替レート）によって大きく変化します。この為替レートの変動と私たちの生活との関係に関する説明として正しいものを、次の（ア）～（エ）の中から１つ選び、記号で答えなさい。

（ア）　外国通貨の価値があがると、海外旅行費用が安くなる。
（イ）　外国通貨の価値がさがると、輸入品が高くなる。
（ウ）　日本円の価値があがると、輸入品が安くなる。
（エ）　日本円の価値がさがると、海外旅行費用が安くなる。

選択肢で言われている「外国通貨（一般的にはアメリカドル）の価値がさがる」「日本円の価値があがる」ことを円高といい、外国通貨に対して円の価値が高くなることを意味します。例えば円の価値が２倍（１ドル＝２００円→１ドル＝１００円）になると、同じ１００円玉でも２倍のドル貨幣（１ドル→２ドル）と交換してもらえますし、２倍のアメリカ製品が買えるようになるのです。つまり、海外旅行にかかる費用が安くなり、輸入品の値段が下がって輸入がし易くなる反面、日本製品の値段は上がり輸出は困難になります。選択肢（ア）～（エ）のうち、このことを正しく説明しているのは（ウ）しかありません。

第２回　第３問（地理分野）

地理分野の問題は，表や図を「読む」ということを求めています。「見る」とは違う「読む」という活動です。

例えば問５の問題で使われている表３を見てみましょう。

表３

	年間総実労働時間	週休日以外の休日	年次有給休暇
日本	1996時間	15日	8.4日
アメリカ	1948時間	10日	13.1日
イギリス	1888時間	8日	25.0日
ドイツ	1525時間	8日	31.2日
フランス	1538時間	11日	25.0日

（『観光白書』より）

この表を「見た」だけでは「日本の労働者は働き過ぎなのかな」と思うぐらいでしょう。しかし「読む」とは他の国と比較して，「実労働時間も長いけれど，有給休暇の日数がすくなくて，国民一斉の休日が多いんだな」と理解し，「だからゴールデンウィークや連休の時期に人が集中するのだな」と判断できるのです。表の裏に隠れた関連性をみいだすこと，これが「読む」ことなのです。

つぎに図を読んでみましょう。問３の日本地図です。

これは日本の火山の分布図です。「日本には東日本火山帯と西日本火山帯がある」という知識を持っていれば２つにわけることができたかもしれませんが，これではこの図を「読んだ」ことにはなりません。「東日本火山帯」という知識がなくとも，この図で分布の密なところと疎なところが判断できると思います。（分布があるところは意識をしやすいのですが，地理では分布がないところも大切な場所なのです。）すると東日本中心の一群と西日本中心の一群が見つかると思います。またその東日本中心の一群の分布をじっくり読むと，それらは列になっており，その列が北海道と東北～中部地方，伊豆地方と方向性が違っていることがわかると思います。このことから太平洋プレートが千島カムチャッカ海溝・日本海溝・伊豆小笠原海溝に沈み込んでいる様子が想像でき，その沈み込みの結

果としての火山活動の列であることが理解できます。これが図を「読む」ということなのです。はじめから「東日本火山帯」として憶えてしまっている知識では，その原因をこの日本地図で「読む」ことは難しかったと思います。

以上例をあげて述べてきたように，聖光の社会科では「知っているかどうか」よりも「考えて答えを引き出せるかどうか」を重視しています。受験生は，入試対策としてたくさんの過去問を研究すると思いますが，「知っていたからできた」「知らなかったからできなくても仕方がない」でよしとせず，「知らなかった」問題こそ自分のすべての力を使って挑戦してみることが大切です。

入試問題は，中学の先生たちから受験生への「メッセージ」と思って下さい。